「あいるらんど」とはどこのこと？　ー変奏される丸山薫「汽車に乗って」ー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050861

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「あいるらんど」とはどこのこと？
―変奏される丸山薫「汽車に乗って」―

鈴木　暁世

丸山薫（一八九九―一九七四年）の「汽車に乗って」という詩は、彼が二八歳の時、同人誌『椎の木』第九号（一九二七年六月）に発表したものである(注1)。

汽車に乗って

汽車に乗って
あいるらんどのやうな田舎にゆかう
ひとびとが日傘をくるくるまはし
日が照つても雨のふる
あいるらんどのやうな田舎へゆかう
窓に映つた自分の顔を道連れにして
湖水をわたり　とんねるをくぐり

珍らしいをとめの住んでゐる
あいるらんどのやうな田舎へゆかう

この詩には、川口晃によって曲がつけられたため、合唱曲として学校で歌った思い出がある人も少なくないのではないだろうか。現代でも、丸山薫が一二歳の時から住んだ愛知県豊橋市のＪＲ豊橋駅の構内には、木々が描かれた明るい若草色の背景に、詩「汽車に乗つて」の詩が印刷された垂れ幕がかかっており、駅を利用する人々は、彼の詩を読むことで旅への思いに誘われるという工夫がなされている。また、雑誌『SWITCH』がシンガーソングライターCocco の特集を組んだ『Cocco—Forget it, let it go SWITCH SPECIAL ISSUE』（スイッチ・パブリッシング、二〇〇一年）では、アイルランドを旅したCocco の写真と共に丸山薫「汽車に乗つて」が掲載された。それだけではない、Cocco は、丸山薫の詩集『幼年』（四季社、一九三五年）に改稿されて掲載された、「汽車に乗つて」の詩の一部をタイトルに用いたシングルＣＤ「陽の照りながら雨の降る」を二〇〇六年にリリースした。Cocco が作詞した「陽の照りながら雨の降る」の歌詞は、丸山薫の詩の世界を、彼女の故郷である沖縄の言葉「ハイヤイヨ」を用いることによって応えたものとなっている。

このように、丸山薫「汽車に乗つて」は、現代でもさまざまな場面で、人々に親しまれている。その一番の理由は、カタカナの「アイルランド」ではなくひらがなで書かれた「あいるらんど」

という国名が作り出す異化の作用、日本という極東の島国からアイルランドというイギリスの西に浮ぶ極西の島国へと「汽車に乗つて」「ゆかう」という矛盾が――地続きではない島から島へどうやって「汽車に乗つて」行くんだろうという疑問が読者には当然湧くだろう――、現実のアイルランドではなく、どこか非現実的な「あいるらんど」へのロマンチックな夢想を旅情とともにかき立てるからではないだろうか。

小田実は、『何でも見てやろう』（河出書房新社、一九六一年）のなかで、「これを口ずさめば、誰だってアイルランドにいってみたくなるではないか」と書いている。小田実によると、丸山薫の「汽車に乗つて」は、現実の「アイルランド」へ「いってみたくなる」気持ちをかきたてることにも一役買ったようである。一方で、司馬遼太郎は『街道をゆく　愛蘭土紀行』（朝日新聞社、一九八八年）で、「詩が発表されたころは、軍部が大きく勢力をひろげつつあった。そういう閉塞のなかで、丸山薫は大きなからだをまるめ、動物園の象が草原を恋うようにして海のかなたの「あいるらんど」を恋うたのである」と述べている。司馬は、丸山薫が現実のアイルランドと重なる海のかなたの「あいるらんど」を「恋うた」のは、詩が発表された頃の軍部の勢力が伸張し閉塞していく日本の状況の反作用によるものであるとの解釈を示している。高橋哲雄は『アイルランド歴史紀行』（筑摩書房、一九九一年）において、この詩には「丸山のせきとめられた海へのあこがれ」があると指摘し、「アイルランドは東西どちらを回っても北半球ではいちばん遠い国だから、その分長く船に乗っていられるわけで、その意味では彼にとって理想の異国といえないわけでは

ない」と述べている。高橋は、丸山薫の父・丸山重俊（一八五五―一九一一年）が、明治政府の内務省の官吏であり、一九〇七年に韓国政府警視総監に着任したことに着目し、幼年時代の薫が、一九〇五年に父親と共に韓国の漢城（後の京城）に移住した経歴がこの詩の背景にあると指摘している。彼は、「彼の朝鮮体験から、同じく強大な隣国に支配されたアイルランドの民衆への同情と親しみへは、ほんの一歩でしかないからだ。それが、無意識のうちであれ、「汽車にのつて」に結実したのではないか」と、丸山が漢城で目の当たりにした日本の支配に虐げられる朝鮮の民衆への同情が、アイルランドへの「同情と親しみ」につながったのではないかと述べている。司馬や高橋の指摘は、丸山の「汽車に乗つて」を、成立した一九二七年の時代状況と照らし合わせて考えている点で重要である。イギリスの国内植民地という状況から、一九世紀から盛んになる自治独立運動、アイルランド独立戦争（一九一九―一九二一年）を経て、一九二二年にアイルランド島三二州のうち、南部二六州が分離して成立したアイルランド自由国を想起させる「あいるらんどのやうな田舎へゆかう」と書くこの詩には、「あいるらんど」というひらがな表記によって異化されてはいるものの、帝国主義的政策のもとアジア圏における覇権の拡大をはかる日本と、イギリスの国内植民地状態を脱そうともがいたアイルランドの状況の対比が浮かび上がってくる。

ただ、この詩は、なぜ「あいるらんどへゆかう」とは書かれず、「あいるらんどのやうな田舎へゆかう」と書かれているのだろうか？　佐藤亨は、この詩の「あいるらんど」という表記が、カタカナの「アイルランドのような田舎に行こう」と書き替えられ、現在アイルランドへの旅行案

内にしばしば引用されることについて、「現在、「アイルランドという田舎へ行こう」という風に意味を変えているようだ」と指摘し、近年のアイルランドブームについて、「「アイルランド」はわれわれ日本人が身構える必要のない心安らぐ異邦、懐かしさを感じさせる「異邦のふるさと」として人びとの間で親しまれている」ためだと述べている（注2）。佐藤が指摘するように、現在この詩は、現在、旅行社、鉄道会社、酒造会社の広報に使われている。一例を挙げると、サントリーの公式ウェブサイト上の連載「オンドリのしっぽ」の第一一回「緑の祝祭日　アイリッシュミスト」において達磨信は、丸山薫の詩「汽車に乗つて」を引用したあと、「この詩が頭に浮かんでくると、決ってリキュールの「アイリッシュ ミスト」とカクテル「シャムロック」を飲みたくなる」と続ける（注3）。一九四八年にタラモア蒸留所で誕生した「アイリッシュ ミスト」がアメリカでよく売れ、第二次世界大戦後の衰退しかけていたアイルランド蒸溜業界の希望の星となったことを述べながら、「独特のハーブ風味に溶け込んだ柔らかな感覚がのどかさを誘い、エメラルド島と呼ばれる緑豊かなアイルランドの田舎へ行こう、となる」と続けている。丸山薫の詩「汽車に乗つて」が頭に浮ぶと、アイルランドの酒が飲みたくなるというように、この詩は実際のアイルランドへの旅へと誘うだけではなく、アイルランドの酒のプロモーションまで果たしているようだ。丸山薫の「あいるらんどのやうな田舎」という一節がアイルランドのイメージ形成に一役買い、そうして形成されたイメージとしてのアイルランドが丸山薫の詩を「あいるらんど」ではなく、現実のアイルランドへと結びつける相互作用によって、この詩は現在アイルランドの広報、ある

種のコピーのような役割を果たしてもいると言えるのではないか。

この詩は、発表時の一九二七年当時の日本において、大正期から盛んになったウィリアム・バトラー・イェイツ、レディ・グレゴリー、ジョン・ミリントン・シングらアイルランド文学の翻訳・紹介記事や自治独立運動からアイルランド自由国建国の経緯とその後の内戦（一九二二―一九二三年）とを報じる記事によって、「アイルランド」のイメージがある程度確立され、かつポピュラーになっていたことを示している。この詩においては、「汽車に乗つて」行くことが出来る土地、すなわち地続きの「田舎」を、「あいるらんどのやうな」と表現した点にこそ着目すべきだろう。つまりこの詩の「あいるらんどのやうな田舎」は、異国ではなく「日本」なのである。確かに、「ひとびとが日傘をくるくるまはし／日が照つても雨のふる」という風変わりで「めずらしい」、日常とは異なるあべこべの世界のような「あいるらんどのやうな田舎」が描かれている。したがってこの詩は一見、地続きであるにしても、自らの風土や文化とは異なる異国の地へ行きたいという願望を表しているようにも思える。

だが、「あいるらんどのやうな田舎へゆかう」と二度リフレインした後の六行目に置かれる「窓に映つた自分の顔を道連れ」という表現こそが、この詩では重要なのではないだろうか。すなわち、「あいるらんど」は、「汽車に乗つて」行ける範囲にある少々変わった風習を持つ「田舎」に重ねあわされ、さらに同時に、目的地であるどこか日本の「田舎」へ向かう汽車の車窓から見える「あいるらんどのやうな田舎」の景色もまた、「窓に映った自分の顔」と重ねあわされる。すな

わち、「あいるらんどのやうな田舎」を媒介として、「自分の顔」‐日本の「田舎」‐「あいるらんど」が重ねあわされているのである。車窓に鏡のように映る「自分の顔」を旅の道連れとするということは、「あいるらんどのやうな田舎」への道中では常に「自分の顔」――つまり、自分の姿と、「あいるらんどのやうな田舎」への期待が一体化されているということである。都市生活においては抑圧され、本来あるべき姿で振る舞うことの出来ない「自分の顔」が、「あいるらんどのやうな田舎」では、自由にのびのびと存在できる。「自分の顔」を道連れにした旅、それは自足したひとり旅への夢想であり、自らの心のなかへの旅でもあろう(注4)。それは、すなわち、この詩での「あいるらんどのやうな田舎」とは、完全な他者、未知のものと出会うことで予期せぬ意識変革や自己の再発見を与えてくれる土地としては期待されていない、ということになるだろう。「あいるらんどのやうな田舎」は、ここと地続きであり、今現在の自分を変えることなく安心して遊ばせることのできる、自分の土地として描かれているのだ。

丸山薫と親しく交わった萩原朔太郎が、「汽車に乗つて」が発表される前に書いた「旅上」を横において考えると、この詩の「あいるらんど」の特色がより鮮明になると考えられる(注5)。

旅上

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若草のもえいづる心まかせに。

丸山薫の詩「汽車に乗って」の「あいるらんど」というひらがな表記と同じく、萩原朔太郎「旅上」でも「ふらんす」がひらがなで表記されている。西原大輔が、「平仮名表記の「ふらんす」は、永井荷風『ふらんす物語』を意識しつつ、語り手の心の中にある遙かな美しい異国を仮託した表現」(注6)と指摘しているように、「ふらんす」という言葉を一行目と二行目でリフレインすることで、あまりに遠く行きたいと思っても行けないために心の中で思い描いた異国「ふらんす」への

憧憬があらわされている。「われ」は「せめては」、「汽車」に乗って「きままなる旅にいでてみん」とするのである。この詩では、「ふらんす」と、「われ」が「山道をゆく」「汽車」で訪れる土地は異なることが示唆されているものの、その旅は、夢想される都市である「ふらんす」へ行く時のように「新しき背広をきて」いくと書かれるように、新しいものとの出会いを期待されていると考えられる(注7)。八行目と九行目の「五月の朝のしののめ／うら若草のもえいづる心まかせに」という結びも、春から夏へと移る五月に萌え出でたばかりの若草と、「朝のしののめ」という一日のはじまりを示す言葉を、接続詞「の」を用いて重ねていくことで、何かが新しくはじまる予感と期待が示されている。それは、「うら若草のもえいづる心」と書かれる伸びやかで柔軟な若者の心が、この旅に新鮮な出会いを求めていることをあらわしているだろう。六行目と七行目の「みづいろの窓によりかかりて／われひとりうれしきことをおもはむ」という「われ」の姿勢が示すように、「新しき背広をきて」、新しい出会いを求める旅では、「われ」は道連れを必要とせず「われひとり」である。汽車の中の自分の顔が反射しているのではない「みづいろの窓」は、車窓の外の光景、遠くまで晴れ渡った空が見える窓のことであろう。

丸山薫「汽車に乗つて」の八行目の「めずらしいをとめの住んでゐる」という一節は、エドワード・W・サイードが『オリエンタリズム』で指摘したような、自らの属している国や文化よりも劣っていると認識している国や文化――この詩では都市に「あいるらんどのやうな田舎」が対置されている――を、「めずらしいをとめ」として表象するオリエンタリズムを内包する目線が看取され

る（注8）。旅へと出るにしても、「自らの顔」を道連れにしていくことで、「あいるらんどのやうな田舎」を次々と「自らの顔」の中へと領有していく主体があらわれ、「めずらしいをとめの住んでゐる／あいるらんどのやうな田舎へゆかう」という最終行に至って、見られる女性に対して、見る男性としての主体、「あいるらんどのやうな田舎」を自らのものとしていく主体が立ち上がってくるのである。自らの土地とは異なる風習や土地、女性も、車窓を鏡として「自らの顔」と二重写しとし、自らの顔の中へと投影することによって、自らのものとしていくまなざしが描かれているのではないだろうか。

萩原朔太郎「旅上」の「われひとり」の「われ」は、「ふらんす」を夢想しながらの汽車の旅に新しい出会いや自己変革を、丸山薫「汽車に乗つて」の「窓に映つた自分の顔を道連れ」した旅を夢想する「自分」は、自己変革を伴わないエキゾティシズムやノスタルジーを求めていると言えるのではないだろうか。

萩原朔太郎は、一九三九年十月一三日付の丸山薫宛書簡（注9）で、

> 東北地方は日本の原料国であり、日本のアイルランドである。明治政府は、政策上から故意に東北地方を非文化にし、農業原料国として統治した。それは明治政府と伊藤博文の聡明さを語るものです。なぜなら犠性（ママ）がなければ文明は進歩しないからです。古代ギリシアの文化は、奴隷を労役することによって発達し、英国はアイルランドを原料国とするこ

とによつて隆興し、資本主義文化は労働者をサク取することによつて繁盛した。奴隷もなく、殖民地もなく、しかして尚未だ資本主義の開明しない時代の日本が、国内の一区域を原料国とし、アイルランド化することは、政策上やむを得ない必然のことでもあつたのです。もし然らずんば、今日の如き日本の富強は、到底有り得なかつたでせう。板垣退介(ママ)の自由民権党は、この政策に於て伊藤博文を攻撃した。自由党の地盤が、由来東北地方に根を張つたのはこの為です。

と指摘し、丸山に「借問す。君は伊藤博文と板垣退介(ママ)と、明治政府と東北農民と、何れに多く同情しますか。もし前者に加担すれば、君は即ち器質的に英国人であり、アングロサキソンの冷知と偏屈性を気質するものである」と尋ねている。萩原朔太郎は、英国—アイルランド、帝国—植民地、明治政府—東北地方、文明の進歩—その犠牲、文化の発達—奴隷の労役、資本主義文化—労働者の搾取という多重的な権力構造を浮きぼりにし、そのなかで近代日本における東北地方の位置づけを、英国に搾取されたアイルランドと同様に搾取されてきた側として捉え、英国人かアイルランド人か、明治政府か東北農民か、どちらの方に同情するのか、丸山薫に質問したのである。

アイルランドを日本の「田舎」に重ねあわせる比喩は、近代日本においては珍しくない(注10)。「汽車に乗つて」は帝国主義的な支配と被支配、搾取と被搾取というイメージを喚起するアイルランドという国名を「あいるらんど」という異化された国として描くことで、植民地支配からの

自治独立への道というシビアな歴史を歩むアイルランドという国名の印象をマイルドにし、文明の中心から珍しい風俗が残る後進の田舎への旅を、異国情緒をかき立てつつノスタルジックに描くことに成功したと言えるだろう。フランスやドイツやイギリスにも美しい田舎はあるが、「ふらんすのやうな田舎にゆかう」や「どいつのやうな田舎にゆかう」、「いぎりすのやうな田舎にゆかう」では成立し得なかったと考えられる。丸山薫の詩で「汽車に乗つて」「ゆかう」と書かれているのが、なぜ「あいるらんどのやうな田舎」なのか、改めて考えてみると面白いのではないだろうか。

（注1）本稿では発表された当時の時代状況を考察の対象に含むため、『椎の木』第九号（一九二七年六月）に掲載された初出時の「汽車に乗つて」を論じていきたい。詩集『幼年』（四季社、一九三五年）収録の「汽車に乗つて」は、「汽車にのつて／あいるらんどのやうな田舎へ行かう／ひとびとが祭の日傘をくるくるまはし／陽が照りながら雨のふる／あいるらんどのやうな田舎へ行かう／窓に映った自分の顔を道づれにして／湖水をわたり　隧道をくぐり／珍らしい顔の少女や牛の歩いてゐる／あいるらんどのやうな田舎へ行かう」。

（注2）佐藤亨『異邦のふるさと「アイルランド」　国境を越えて』（新評論、二〇〇五年）。河野賢司は「狐の嫁入りの超自然的な天候、母親の記憶につながる日傘、鳥や花のイメージとも重なる自然児の少女たち―これらを配した理想的な田舎の典型として丸山の脳裏に浮かんだのが、アイルランド」と評す

る（『周縁からの挑発―現代アイルランド文学論考』溪水社、二〇〇一年）。

（注3）http://www.suntory.co.jp/wnb/essay/11.html（二〇一六年一一月二五日閲覧）

（注4）「窓に映った自分の顔を道づれにして」に関して、阪本越郎は「「窓に映った自分の顔を道づれにして」という詩句だけは、彼の幼時からの土地移動の折の実感であるに相違ないが、そのほかは彼の「遠方へのあこがれ」の空想であろう」（『日本の詩歌』中央公論社、一九六八年）と述べ、この部分にのみ「実感」が表出していると記しているが、白井たつ子は、この部分を含めた詩全体が「「遠方へのあこがれ」の空想」から成り立つと指摘し、「窓に映った自分の顔を道づれにして」には「「夢みられたかなたへの憧憬と、その無限の追求とが、強い自我を支えとしてなされるものであるがゆえに、ときとして「自分の顔を道づれに」するような孤愁の翳を帯びることもあるというのは、ローマン的な詩の特性であろう」と述べる（白井たつ子「丸山薫の世界――『幼年』について――」『ノートルダム清心女子大学国文学科紀要』一九六九年三月）。

（注5）萩原朔太郎『純情小曲集』（新潮社、一九二五年）。初出は、『朱欒』第三巻第五号（一九一三年五月）。初出時には無題。

（注6）西原大輔『日本名詩選1　明治・大正篇』（笠間書院、二〇一五年）。

（注7）長野隆は、「ふらんす」という「〝幻像の都会〟がそれ自体都会として実在する場を、当時の日本地図の上に持ってはいない」と言った上で、この詩の表現が「都会思慕を内に秘め、田舎（前橋）脱出の夢想を自在に育む場をもっていたとすれば、〝幻像の都会〟とは、もはやこの「汽車の客室」の

風景を指すしかあるまい」と述べており、旅の終わりや目的地ではなく旅の「現状」を重視する。その上で、汽車の客室においてこそ、「洋装＝旅装、つまり「新しき背広」も、ここではあり得べき風景の一部と化し、違和なく受けいれられる。というより、擬態＝洋装こそ必須なのだ」と述べており、興味深い（「「旅上」の風景　萩原朔太郎の〈近代〉　第一回」『詩学』詩学社、一九八七年一月）。

（注8）Edward Said, *Orientalism*, London: Routledge and Kegan Paul, 1978. 板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー、一九九三年）

（注9）『萩原朔太郎全集』第一三巻（筑摩書房、一九八七年）。萩原朔太郎の書簡におけるアイルランドへの言及は、安智史氏のご教示による。

（注10）拙著『越境する想像力　日本近代文学とアイルランド』（大阪大学出版会、二〇一四年）。

〔附記〕本稿は、拙著『越境する想像力　日本近代文学とアイルランド』序章の一部における丸山薫「汽車に乗って」への言及箇所をもとに、大幅に加筆・修正を施したものです。また、本研究はJSPS科研費15K16680の助成を受けたものです。